

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2016年3月3日放送

「第30回日本乾癬学会① 大会を終えて」

名古屋市立大学大学院 加齢・環境皮膚科
教授 森田 明理

はじめに

2015年9月4日～5日、記念すべき日本乾癬学会第30回学術集会を名古屋にて開催させていただき、ありがとうございました。一般演題は、過去最高である150演題を超え、参加者は、1,000名を超えました。皮膚科の中の1つの疾患で、ここまでの演題数、参加者が集まっていたのは、この領域の大きな発展と本邦での多くの皮膚科の先生方のご協力、さらには、免疫病態をベースとした乾癬治療の創薬が成功し、多数の画期的な薬剤の登場、もしくは治験の最終フェーズを迎えているからだと思います。セクキヌマブが、世界の中で、日本で初めて承認されたことが、この最な証拠になると思います。これから、さらに乾癬の治療は発展していきますが、2010年の生物学的製剤の夜明けから、順調に開発が進み、私たち皮膚科の診療レベルも著しく向上しました。



本学会の目的と今回のテーマ

さて、本学会の目的は、乾癬の病因・病態にせまり、具体的な評価方法やバイオマーカーを含め、外用・光線・内服・生物学的製剤という4つの乾癬治療の基軸から、標準的治療のプロトコールとして、いつ、どの治療を選択するかなどについて、作成するための議論の場であるとともに、皮膚科医の乾癬に対する診療レベル向上のための教育も兼ねて行いたいと考えました。また、乾癬に関連する乾癬性関節炎や脊椎関節炎など、リウマチ専門医の先生方に多数のご参加とご協力をいただき、乾癬診療について、幅広く扱うことができたと思います。

今回のテーマは、「グローバルトップの乾癬治療をめざして」ということにしましたが、海外や近傍のアジア諸国に比べても、承認されていない薬剤があり、本邦における乾癬治療が国際基準となり、さらに、日本における皆保険制度のなか、最良の医療ができるように、私たちが考えることが多数あるという気持ちを含めまして、このテーマに決めました。

メトトレキサートの公知申請

は進行中であり、また、アシトレチンが使用可能になることなどが望まれています。1960年にスタートした日本の皆保険制度は、すばらしく、アジア内の多くでは、乾癬の生物学的製剤に対する保険制度はなく、あっても使用には大きな制限がかかります。日本での、この保険制度を生かし、費用・負担面においても、適切な医療を提供することが求められます。

2010年1月の生物学的製剤の登場から乾癬治療は、画期的な変貌を遂げました。しかし、治療がよくなれば、治療ベースで患者の治療を考えることになるかもしれませんが、やはり、生活習慣や環境因子、多因子的な疾患である乾癬を考えた場合、やはり、患者ベースの治療を考えなければなりません。寛解、バイオフィリーを目指した治療がどのように乾癬で達成されるのかが今後の注目されるところです。そのなかで、早期の乾癬（乾癬性関節炎）は、最も考えられることで、早期に診断・評価、重症度分類をすることで、皮疹・関節炎の無い状態、すなわち活動性が低い状態を保ち、皮疹が拡大し、活動性が悪化する場合には、適切な時期に治療の変更が必要だと思われます。すなわち、タイムマネジメント、タイトコントロール、トランジション、乾癬治療におけるこの3Tが、ひとつのキーワードになると思われませんが、今後の多施設共同臨床研究（医師主導型）がエビデンスを高めるためにも必要ではないでしょうか。150演題の一般演題では、これらのことが、日常診療からも検討できたのではないかと思います。

講演・シンポジウム

まず、本学会のテーマに沿って、ノーベル賞受賞者講演として、天野浩先生（名古屋大学未来材料・システム研究所未来エレクトロニクス集積研究センター・センター長）には「LEDの医療応用」のお話をいただき、LEDの開発の経緯と、また私との7年間にわたる共同研究の成果も含めていただきました。波長ごとの特性を生かしたUV-LEDによる光線療法機器の開発は、まだ3～5年の時間がかかり、そして具体的に活発化するのにはそのくらい

The 30th Annual Meeting of the Japanese Society for Psoriasis Research
第30回日本乾癬学会学術大会
グローバルトップの乾癬治療をめざして
会期 2015年9月4日・5日
会場 ウェスティンナゴヤキャッスル
名古屋市中区錦の庄町19号
会長 森田 明理
名古屋大学大学院医学研究科皮膚病理科
E-mail : jspr30@cs-oto.com URL : <http://www.cs-oto.com/jspr30/>

の時間がかかるのではないかと思います。また、青色 LED と比較して、UV-LED の効率はよくなく、今後の開発研究が待たれます。

特別講演では、Department of Medical microbiology and Immunology, University of Toledo college of Medicine の高島明先生、京都大学大学院医学研究科皮膚科学の椛島健治先生、名古屋市立大学大学院医学研究科免疫学の山崎小百合先生の 3 名の先生から、乾癬の免疫病態を好中球、制御性 T 細胞、メタボリック症候群の視点から御講演いただき、その複雑さを紐解き、乾癬という疾患へのアプローチが十分に理解できたのではないかと思います。

さらには、シンポジウムは 3 つ用意し、その 1 つは昨年につづき、セカンドラウンドとして、乾癬治療本音トークを今回の乾癬学会でも開催致しました。乾癬治療の問題点やコツなど、企業セミナーでは聞けないエキスパートの本音トークで、十分なディスカッションができたのではないかと思います。また、今年の乾癬学会にも引き継がれるシンポジウムになると思います。

その他のシンポジウムでは、海外から、Richard Langley 先生、Ulrich Mrowietz 先生にもご講演いただき、「乾癬 Bio 治療-残された課題について考える」では、見事な方向性を感じました。シンポジウム 3 では、PsA とその周囲の疾患（AS、JIA を中心に）をタイトルとして、乾癬に関係する脊椎関節炎、若年性特発性関節炎の診断と治療のご講演をいただきました。その他のセミナーを含め、リウマチを含めた他領域の先生方にご講演をいただき、乾癬と関連ある疾患の理解を深めていただいたものと思います。

また、4 つの教育講演では、光線療法、生物学的製剤の安全性など、明日からの乾癬の診療に役立つ教育講演を企画しました。特に、生物学的製剤の安全性では、本邦でもトップクラスの研究者の先生に、肝炎、呼吸器などの面からの詳細にお話をいただきました。

Asian セッションとして、中国、韓国、台湾から乾癬の治療、研究に深く関わる先生方にもご講演いただき、親睦を深めるとともに、診療での協力体制を築いていくことにも、触れることができました。

さらに、今回の特徴でもありますが、学会終了後には、若手セミナー（初期研修医から卒業後 14 年目までを対象として）開催をしました。この若手セミナーでは、乾癬の治療や病態に焦点をあて、診療レベルの向上と若手の交流（情報交換）を目的とし、2 つの企画を行い、1 つは関節炎・エコーセミナー、もう 1 つはこれからの乾癬診療として、これから乾癬診療に取り組んでもらうような若手皮膚科医に参加していただきました。各 20 名程度の参加でしたが、大変に盛り上がり、今後の乾癬診療、研究が期待されるところです。



おわりに

最後になりますが、150 という多くの一般演題が集まりましたこと、心より感謝いたします。どの会場も大変多くの参加者があり、学会は盛会のうちに終わり当初の目的を達したと思います。

皆様とともに、乾癬について熱く議論し、皮膚科臨床レベルの向上にむけることができましたことをこの場を借りて、心から感謝したいと思います。

